

## 4月1日 受難の主日

イザ 50:4~7    フィリ 2:6~11    マコ 15:1~39

### 1. マコ

v.2 「ピラとがイエスに、“お前がユダヤ人の王なのか”と尋問すると、イエスは“それは、あなたが言っていることです”と答えられた。」

v.34 「三時にイエスは大声で叫ばれた。“エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。”これは“わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか”という意味である。」

vv.37-38 「しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」

マルコ福音書の記述によると、イエスが最後に口を開かれたのはこの三回だけで、残りの部分は初代教会の解釈による伝承と考えられます。マコ 14:62 をこれに加えるべきかも知れません。これは旧約聖書の二つの箇所からの引用句であって、それは 詩 110:1「わが主に賜った主の御言葉。“わたしの右の座に着くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう”」と、ダニ 7:13「見よ、“人の子”のような者が天の雲に乗り“日の老いたる者”の前に来て、そのもとに進み……」によっています。

いったい傍観者というものは、いくらでも減らず口をたたくものですが(vv.13,18,29-32)、同様に多くの“聖書物語”でも、さらに司祭たちの説教でも、傍観者としての人間の勝手な感想や敬虔を装った作り話のようなものが、神の子である苦難のキリストを抜きにして語られることが多いのです。

「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。」(ヘブ 5:8) 「人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(フィリ 2:7-8) 御子の従順とは、いったい何に対する、だれへの従順だったのでしょうか。今朝の福音書のテキストの中にあるイエスの言葉からは、何が聞き取れるのでしょうか。そして私たちのキリスト教信仰にとって、それはどんな意味があるのでしょうか。

### 2. フィリ

イエス・キリストが従順をささげられたのは、彼をお遣わしになった方の御心に対してでありました(ヨハ 5:30, 6:38)。それが可能であったのは、イエスがその父の御心を知っておられたからです(ヨハ 6:39-40, 8:55, 12:27)。この父の御心を解き明かし、解釈することがキリスト教神学の課題であって、教会の教えと司祭の説教はしっかりと神学によって支えられていなければなりません。新約聖書は初代教会の宣教を支えた使徒たちの神学の、いわば果実であります。

この新約聖書が、キリストの父なる神への従順を理解する鍵として、イザヤ書の中の“僕の歌”を取り上げ、しかもこの理解の仕方がイエス御自身にまで遡ることを福音書で語っているのです。使徒たちが原

始教会で繰り返し説教し、当時の信者たちに熟知されていたこの背景を前提にして、今朝の第二朗読は理解されねばなりません。

旧新約聖書を通して、“従順”とは神の御心に徹底的に“聞き従うこと”でありました。現代人はこれを、単なる人間関係における徳目に置き換えて理解してはならないのです。vv.6-9を、人が敬虔なキリスト者になるための手本のように読むとき、神のことばの輝かしい恵み(エフェ1:6)の大部分を捨ててしまっています。これは、「神がキリストによって世を御自分と和解させ」(II コリ5:18)、「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜みず死に渡された」(ロマ8:32)福音の出来事の告知以外の何ものでもないからです。

### 3. イザ

v.5 「主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかった。」

イザヤ書の“僕の歌”とは、①42:1-4, ②49:1-6, ③50:4-9, ④52:13～53:12 であって、私たちが新約聖書が語る“キリストの受難と死に勝利しての復活”を正しく理解するためには、主と共に、そこで歌われている神の御心に“耳が開かれる”必要があるのです。

「彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。……そのわたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた。」(53:5-6)

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハ3:16)

教会の信仰とは、使徒や預言者の宣教という土台の上に建てられているのですから(エフェ2:20)、私たち信者はその宣べ伝えられた福音を確かに聞き、救いへの神の招きに“聞き従う”ことが大切です。それは信者一人一人が自ら聖伝と聖書を学ぶことによって、聞き、理解し、信じるべきことであって、私たちは決して“怠け者の悪い僕”(マタ25:26)になってはなりません。

今朝の聖書朗読を通して聞いた“御子の十字架の死に至るまでの従順”が、私たち信者一人一人にとって“御子キリストへの私たちの従順”(ヘブ5:9)の手本となる、実り豊かな聖週間でありますように。

アーメン。

## 4月8日 復活の主日

使 10:34~43    コロ 3:1~4    ヨハ 20:1~9

### 1. ヨハ

v.9 「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」

教会では毎年この日にみなさん“イースター、おめでとうございます”と挨拶します。英語のイースターカードの決まり文句は“Happy Easter”です。でも、何がおめでたいのか、なにが Happy なのか、ほとんどの信者はあまり実感がない……、それでこの挨拶に気恥ずかしい思いをもちたりします。

さて、今朝の福音のテキストには何かおめでたい、何か Happy なメッセージが語られているでしょうか。そこに書かれているのは、墓が空だったという事実だけであり、しかもその最初の発見者である婦人は、これをてっきり墓荒らしの仕業だと判断しました(v.2, 20:13)。それは何も護教的、あるいは教育的な手が加えられる以前の、あるがままの事実の伝承であると受け取るのが正しいのです。イエスが復活したのは本当だったとか、だからキリスト教は本物の宗教なのだ…… などという説明のために、この伝承があるのではないという冷静な判断が大切であるように思われます。

原始教会では、洗礼志願者のためにも信者たちのためにも、その教育の中で主イエスの復活が当然語られていました。「神はこのイエスを復活させられた……、このイエスを神は主とし、またメシアとなさった」(使 2:32,36)、「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)、「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています」(Ⅱ コリ 4:14)。原始教会の信仰は使徒たちによる“この事実の証言”の上に成り立っていたのであって、単なる復活という不思議な出来事の科学的証明の上に成り立つ虚構ではありませんでした。

最初に空の墓を見た二人の弟子は、そのときまだ神の御業を何も理解していませんでした。しかし今、その信じている福音の出来事が、歴史の中の出来事であった！ということが、原始教会における使徒たちの宣教の生々しい原動力となったに違いないことを、私たちは理解しなければなりません。

### 2. コロ

w.3-4 「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

キリストの復活のメッセージが語られるとき、私たちキリスト者はこの信仰に喜び踊ります。それがイースターの“おめでとう”であり、“Happy”であることを、多くのキリスト信者に学んでいただきたい。なぜな

ら今日、普通の信者の多くがこの使徒たちが宣教した福音を聖書から聞き取っていないからです。

我が国だけでなく世界中どこでも、ほとんどの葬儀は故人の死を美しく装い、家族や身近な人々の悲しみを和らげる働きをします。“故人は天国に行ったのだ、だから悲しまなくてよい、Happy, Happy”と慰めるのです。それは、人生における最大の“ウソ”でなくて何でしょう。

なるべく考えたくない。でも人はその人生のどこかで“死の恐怖”に襲われて、居ても立ってもいられない経験をするものです。感受性の強い若者が死の恐怖をいかにしても自分で処理できずに自殺することがあり、癌やあるいは不治の難病を宣告された人が針のむしろの上でのたうち回るといふ人生は、決して珍しいことではないでしょう。たとえ普段は忘れていても、すべての人は「死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にある」(ヘブ 2:15)のであって、死が怖くないとか、死が美しいものであるなどと言うのは全くの“ウソ”です。

「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声を上げ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ」(ヘブ 5:7)と書かれている「御自分」とは、“私たち罪人に代わっての御自分”であったことを(1ペト 2:24)、そして「わたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた」(イザ 53:6)という十字架と復活の出来事を、あなたはまだ信じていないのですか。洗礼の秘跡によって、私たちキリスト者はみな「キリストと共に死んだ」(v.3、ロマ 6:8)のです。今や私たちの(永遠の)命は、「キリストと共に神の内に隠されているのです。」

私たちキリスト者の人生に残されているのは、ただの肉体の死だけであって、すでにキリストは死に勝利されました。来るべき日には、キリストがその勝利を私たちに与えてくださいます(v.4、1コリ 15:54-57)。

### 3. 使

私たちが毎週ミサで唱える信条の中の、「主は、生者と死者を裁くために、栄光のうちに再び来られます」という条項の重要性を、あなたはこれまで真面目に考えて来たでしょうか。

実に教会は、すでに私たちのために神の裁きに対して御自身を献げ、すべての呪詛(罪が支払う報酬である死)を私たちから取り除いてくださった審判者キリストが、天から来られるのを頭を上げて待ち望んでいるのです。このキリストを信じる者はだれでも、今やその名によって罪の赦しが受けられるからです(v.43)。

アーメン、ハレルヤ。

## 4月15日 復活節第2主日

使 4:32～35    Iヨハ 5:1～6    ヨハ 20:19～31

### 1. ヨハ

vv.20-23 「弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。“あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。” そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。“聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。”」

イエスの弟子たちが・・・後の時代の言葉で言うと・・・使徒に叙階されたのは、イエスが復活された後であったということを、新約聖書は強調して述べています。各々の文書(マタイ、マルコ、ルカ、使徒言行録、そしてヨハネ福音書)で伝えられている形は違っていても、それらに共通しているのは、すでに復活して父のもとへ上られた(20:17)イエスが現れて使徒たちに使命を受け、聖霊によって彼らの働きに自ら共にいてくださる(vv.22-23)という、原始教会の体験でありました。それは繰り返し語られ、信者への教えや訓練の中で頻りに伝えられたであろう“叙階の出来事”の強烈な記憶でありました。

それは初代教会が「使徒や預言者という土台の上に建てられる」(エフェ 2:20)という唯一の目的のために語られたのであって、現代のニュースのような意味での“出来事の報道”ではありませんでした。ですから私たちが今日聖書で知るのとは、いわばこの重大な使徒叙階の出来事のエッセンスのようなものであって、その場面を再現して見せるための描写ではないのです。

信仰や救いを、あたかも人間の心の持ち方の一つにしか過ぎないように考える人は、原始教会が伝えたこのような出来事の重大性を理解することが出来ません。自分の空想の中で聖書の物語りの場面を再現して、そこから自己流の解釈や宗教思想を編み出すこととなります。しかし、私たちが救われて新しい命を与えられた“秘跡”は生ける神の御業であって、それは現在も神の国に向かって進行中の“救済史”の中の出来事なのです。

v.27 「それから、トマスに言われた。“あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばして、わたしのわき腹に入れなさい。”」

トマスにとってだけでなく、その後の時代の信者たちにとっても、信仰の事柄はいわば「目で見たもの、よく見て、手で触れたもの」(Iヨハ 1:1)であって、ただの心の中だけのものではないことを、初代教会は強調しました。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」(v.31)

### 2. Iヨハ

「キリストはご自分の教会の典礼を通して・・・その救いのわざを現し、現在化し、分け与えられるの

です。……キリストは…ご自分の教会の中で…諸秘跡を通して働かれるのです。」(カトリック教会のカテキズム1076) しかもこのことと同時に聖霊は、キリストが歴史の中で実際に「人間の姿で現れ」(フィリ2:7)、私たちの罪を身に負ってヨハネから洗礼を受け、私たちの贖いのために十字架の死を通して御自身を神に献げられた、あの出来事を証してくださるのです(v.6)。

キリストは死に勝利して復活されました。だから…！「神から生まれた人は皆、世に打ち勝つのです。」(v.4)

### 3. 使

v.33 「使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、……」

この使徒たちの証しが、教会を真に教会とするのだということを、主日のミサを共にささげる兄弟姉妹一人一人に深く受け止めていただきたい。“復活を証しする”とは具体的には、私たちが“教会を信じ、罪の赦しをもたらす唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望む”(ニケア・コンスタンチノーブル信条)ということに他ならないからです。

この信仰の証しが忘れられると、教会はその実質を失ってしまいます。骨組みのある宇宙船は、地上に係留中もその姿を保っていますが、信仰の証しのない教会は、空から降りた熱気球のようにその姿を失います。

「イエスは生きておられる」(ルカ 24:23)、「復活なさったのだ」(ルカ 24:6)、「本当に主は復活された」(ルカ 24:34)、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタ 28:20)。そして、「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」(1:11) そうです。「わたしたちの本国は天にあります。」(フィリ 3:20)

アーメン、ハレルヤ。

## 4月22日 復活節第3主日

使 3:13～19 | ヨハ 2:1～5a ルカ 24:35～48

### 1. ルカ

v.45-47 「そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。“次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。”」

私たちが主日ごとに集まって共にミサをささげるとき、いったいどれだけの人が“キリストの現存”(典礼憲章 7)という聖なる事実を実感し、理解しているのでしょうか。初代教会が証言したのは、聖霊が訪れるところには復活のイエスが共におられ、その成し遂げられた永遠の贖いを人々に理解させてくださったという喜びでありました(ヨハ 14:18-20,26, 16:13)。これが彼らにとっての“ミサ体験”でありました。会衆に聖書を理解させてくださるのは復活のキリストであり、このキリストの現存を抜きにしては、聖書は覆いの掛けられた死文でしかありません(II コリ 3:14-16)。「文字は殺しますが、霊は生かします。」(II コリ 3:6)

今日でも“キリストの現存”ということ、本気で幻覚や妄想と同一視する人々がありますが、そのような人々はおそらく聖書を読むことも理解することもしていない、つまり“証人としての使徒たち”(v.48)が伝えたことに無知な人々です。ミサに参加しても、その真ん中に立つ復活のイエス(v.36)を知らない人なのです。

信者がミサ典礼をよく理解し、意識的に、敬虔に、また行動的にこれに参加するということと、聖書を通して神のこばに教えられるということ(聖書の学び)は、堅く結びついて切り離せないのです(典礼憲章 48)。そのいずれが欠けても、私たちの教会は破壊されます(I コリ 3:16-17)。

### 2. 使

v.13 「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。」

フランススコ会訳の聖書は、「その僕イエス」に次のような注を付けています。“この称号(3:26, 4:27, 30 参照)は、イザヤの「苦しむ僕」(52:13～53:12 参照)によるもので、苦しみを通じて救いをもたらすメシアであるイエスに与えられている。” イエスの時代のギリシャ語訳聖書(LXX)では、イザヤ書の“主の僕(‘ebed Yahweh)”の訳語に“παῖς”が使われていました。この語には二つの意味があって、その一は“子”、もう一つは“しもべ”です。それは奴隷(δοῦλος/生まれながらの身分としての奴隷)という語を避けるためであったと考えられます。ですから上記の注の“僕”はすべて“παῖς”です。

そして新約聖書では、この“主の僕”と“人の子”という二つの称号がほとんど同じ意味で使われています。v.13の“栄光をお与えになり”は、イザ 52:13のLXXで使われている“あがめられ”の訳語と同じ

“δοξα(栄光)”の派生語で、ヨハ12:23でも同じイザ52:13を“人の子”の称号と結びつけています。大切なことは、使徒たちの宣教が復活の勝利者イエスをイザヤ書の苦難の僕との関連で解釈していることであって、単なるギリシア語の用語の問題などではないのです。

v.19 「だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。」

これが福音宣教の結論であり、私たちがミサでお会いするイエスは、信じる者に“罪の赦し、からだの復活、永遠のいのち”を与えてくださる救い主です。

### 3.1ヨハ

v.2 「この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです。」

その後に出てくる「神の掟」(v.3)「神を知っている」(v.4)「神の言葉」(v.5)という用語を、いわゆる律法主義的に解釈するのは、聖書の浅薄で表面的な読み方に原因があるのであって、正しくありません。

「罪を償ういけにえ」と訳されている“償う(ιλιάσκομαι)”は、文語訳の時代には“宥めの供物”、口語訳の時代には“あがないの供え物”、そしてフランススコ会訳では“贖いの供え物”と訳されました。このギリシア語は異教の世界でもともと“神の怒りを宥める”という意味で使われていました。しかし聖書にとってはそのような思想は異質であって、神が、ただ神だけが“和解”を与えることが出来るのです(IIコリ5:18-21)。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえ(ιλιασμός/名詞形)として、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(4:10)

どうか「神の掟を守る」(v.3)「神の言葉を守る」(v.5)という表現を、神の怒りを宥める善行や功績のよりに考えないでいただきたい。

私たちが主日ごとに集まって共にミサをささげるとき、“聖霊の交わりの中で、会衆と共にいてくださる復活のイエス”が、その成し遂げられた永遠の贖いを私たちに理解させてくださいますように。信者がミサ典礼をよく理解し、意識的に、敬虔に、また行動的にこれに参加するということと、聖書を通して神のことに教えられるということ(聖書の学び)は、堅く結びついていて切り離せないのですから。

アーメン、ハレルヤ。



## 4月29日 復活節第4主日

使 4:8～12 Iヨハ 3:1～2 ヨハ 10:11～18

### 1. ヨハ

v.14 「わたしは良い羊飼いです。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。」

イエス・キリストはその十字架の死と復活によって、御自分の民である教会の羊飼いとなってくださいました。主キリストは、その復活から終わりの日の来臨に至るこの世の教会の大牧者(ヘブ 13:20、Iヨハ 5:4)であり、ユダヤ人ばかりではなく異邦人もも集めて一つの群れにしてくださいます(v.16)。教会における救いの業は、実に教会の頭であるキリスト御自身の業であることを説明して、典礼憲章は次のように宣言しました。

「このような偉大な業を成就するためにキリストは、常に自分の教会と共に、特に典礼行為に現存している。キリストはミサの犠牲のうちに現存している(秘跡的再現)。……キリストは自身のことばのうちに現存している。聖書が教会で読まれるとき、キリスト自身が語るのである。」(7)

このキリストの御業は、人間がこれを自由に処理したり管理したり出来るものではなくて、ただ信仰に対してだけ開かれており、司祭と会衆一同が心を合わせて尊いいけにえを奉獻し、これを霊の食物として拝領するときに、また聖書の朗読を通して語られる福音が真に「人の言葉としてではなく、神の言葉として」(Iテサ 2:13)聴かれるときに、信じる者の群れである教会の中に“現に働いているもの”(同)なのです。

ですから私たちはいつも信仰的に目覚めていて、キリストの言葉(十字架と復活の福音)を“聞き分ける”(v.16)羊になりましょう。私たち一人一人が本物のキリスト者であるか、本当に救いを受けているかどうかの判定は、「その声を知っている」(10:4)「わたしの声を聞き分ける」(v.16, 10:27)か否かで決するからです。

キリストの十字架の死は、決して予想外の、道半ばの無念の死などではありませんでした。それは神の御心であって(ヨハ 3:16、Iヨハ 4:10)、信仰の創始者また完成者であるイエスは、自ら(v.18)「御自分の前にある喜びを捨て、恥をもちとわなないで十字架の死を堪え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。」(ヘブ 12:2)

### 2. 使

“あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリスト”以外の“ほかのだれによっても、救いは得られません”という使徒ペトロの説教は、新約聖書の中の一つの物語りではなくて、現代の私たちに向かって語られている“現在の神のことば”であります。

WCC(世界教会協議会)が、プロテスタントのほとんどの教派と、東方教会およびローマカトリック教会の合意によって、1983年に正式に承認した“リマ文書(Baptism, Eucharist and Ministry)”は、教会の聖職位階制度に関して次のように述べています。“教会はその使命を達成するために、教会が根本的にイエス・キ

リストに依り頼む存在であるということを公に示し続ける責任を担う人を必要とする。”歴史の教会はそのような“特定の権威と責任を負う人物を欠いたままで存在したことは決してなかった。”

ローマ・カトリック教会は、ペトロの後継者であるローマ教皇と使徒たちの後継者である司教たちが、このような牧者として司教団を構成しているという教理を、公に宣言しています(教会憲章 第3章)。しかしこの司教団は、キリストが天に上げられて見えなくなった(1:9)後の教会で、キリストに代わって“留守番役をする”代理者になった訳ではありません。キリストは現在も教会の大牧者であって、教皇と司教たちはこのキリストから委ねられた務め(κλήρος)に奉仕し、羊の群れの世話をしているのです(1ペト 5:1-4)。私たちは天上のキリストこそが群れの羊の真の牧者(ποιμήν)、監督者(ἐπίσκοπος)であることを決して忘れてはなりません(1ペト 2:25)。そして私たち一人一人は、自らキリストの声を聞き分ける羊になりましょう。

### 3.13/ハ

v.2 「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子です ……」

「ミサが神によって呼び集められた人間同士のことばとしるしによる奉仕であり、その人間の行為を通して神ご自身がわたしたちに語りかけ、働きかけておられる」と、土屋吉正神父はその著“ミサがわかる／序”で書いておられます。実に教会は“ことばの典礼”と“感謝の典礼”を通して神が私たちに語りかけ、私たちがそこで神のことばを聞くという一事によって、基礎づけられ、支えられているということ、真剣に考えていただきたい。私たち一人一人が感謝と喜びのうちに、「御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています」と、本当に言うことが出来ますように。そのために司教団とこれに従属する司祭たちは、神の教会に奉仕しているのですから。                      アーメン、ハレルヤ。